

講義形式の授業で「議論」を行う一つの方法

科目名：技術と倫理

担当教員：飯嶋裕治 准教授（基幹教育院）

形式：リアルタイム型

学年：高年次・大学院基幹教育科目

人数：60人

ツール：Zoom

評価方法：コメント、最終レポート

Q1. この授業で取り入れられた工夫について、改めて具体的に教えてください

この授業では、授業で紹介したトピックについて学生が提出したコメントを次回授業内で教員が紹介し、学術的に裏付けていくという方法で授業を進めていきました。また、毎週全ての学生のコメントに番号を振り、共有しているので、次のコメント時に、前回の別の学生のコメントに対して今回さらに学生がコメントを返して上乘せしていくことを可能にしました。このため、学生は「書面上」で議論を行うことができます。例年と違うのは、対面ではなくオンライン環境にて画面越しに教員が授業を配信するという点のみです。授業内では学生同士の口頭での議論は行っていません。

Q2. 取り入れた結果、学生の反応はどうでしたか

基本的には例年の形式がオンラインとして配信されたものという以外の大きな違いはないのですが、学生のコメントに基づいて授業が設計されているという点で、学生が教員を身近に感じられたのか、例年よりも反響が大きく、「活発に意見交換できてよかった」との意見をもらっています。

② 講義形式の授業でいかに「議論」を行なうか？

▽ある社会的問題に対する「倫理学」的なアプローチの一つとして…

- ・「私たちがすでにわかっている・前提にしている（はず）のこと」を改めて自覚することから始める。
- ・その意味で、特殊な専門知識を必要とせず、「誰でも議論に参加できる」という大きな特徴がある。

▽では授業内でいかに「議論」するか？ —とりあえず文章化された意見を文字上で議論する。

①「技術をめぐる倫理的問題」に関して、誰でも何らかの「自分の意見」をすでに持って（しまっ）ているはず。それはこれまで特に意識したことがなかったかもしれないが、それを言葉に表現してみたい。——「それとなく」思っていることを「それとして」表明すること

②「自分の意見」を提示する際には、必ず「自分がそう思う理由」を一緒に示すこと。

…「自分の意見」の背後には、たとえ意識していなくても、必ず何らかの「自分がそう思う理由」があるはず（価値観）。それが一体何なのかを自覚することが、他者と「議論」をする上で重要。

③「議論」とは、「意見」が異なる者同士が、各自の重視する「理由」をやり取りし合うこと。

…「意見」が違う相手でも、その人がそう主張する「理由」はそれなりに理解可能。時にはそれに説得されることもある。つまり議論するためには、「理解可能な理由の共有」という背景が必要。

*これは、相手を説得するのに有効な議論の仕方（テクニック）より手前の、議論を可能にする大前提。

…各自の「意見」は違えど「議論」ができるのは、「われわれ」が「理解可能な種々の理由」を共有しているから（その中のどの「理由」を重視するかで、様々な「立場」に分岐する）。

授業の初回のレジュメ

Q3. 取り入れるために必要な準備

オンライン化にあたり、必要な準備はZoomのURLの共有のみだったので、それほど例年に比べて負担は増えていません。ただし、対面の授業と変わらず、学生のコメントを読み、それをまとめてこちらもコメントを返す作業に最も時間が必要になります。

～インタビュー雑感～

非常に独特な授業方法だなというのが第一の感想でした。学生に意見交換の機会を与えようとする時、どうしても授業内でのグループワークやディスカッションなどを考えがちですが、人数が多いと難しいことしばしばあります。この授業では、そういったグループの枠すらも越えて、誰の意見に対しても書面上でコメントできます。その意味で、意見交換のために授業外の時間を有効に使った実践だと感じました。